

Study on Genealogy of Technology & Expression in Japanese Castles

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-11-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河津, 優司 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/323

城郭建築の表現と技術の系譜

Study on Genealogy of Technology & Expression in Japanese Castles

河津 優 司
Yuji KAWAZU

はじめに

建築史家（東大教授）藤森照信氏が城について面白いことを言っている。少し長くなるが引用してみよう。

「建築についての物書きをはじめて三十年、これまで古今東西いろんな種類の建物について書いてきたが、なぜか一つだけ触れないものがあることに、今、気づいた。お城である。…(中略)…好きか嫌いかと聞かれば、好きではあるように思う。こう書きながら、自分のこれまでをふり返り、気持ちを確かめつつあるのだが、好きな証拠に、現存する城のほとんどは訪れているし、信州の松本城と播州の姫路城については留学生や外国人の建築関係者にはぜひ訪れるようにすすめてきた。にもかかわらず一文もものしていないのは、城の何についてどう書いたものか入り口が見つからないからだ。私にとって言語化がまことにむずかしいのである。(後略)」(藤森照信著『建築史的モンダイ』「城は建築史上出自不明の突然変異」ちくま新書 2008年)

このあと文は、日本の建築家は城をデザイン的興味の対象としないこと、世間一般に城好きは山ほどいること、にもかかわらず日本のものではないような、国籍不明というか来歴不詳というか、天守閣がなんかヘンに見えること、それは高くそびえるくせに白く塗られているせいであること、そして、天守閣は日本建築史上ただ一つヘンな存在であること、と続く。

近年、韓国の山城や倭城を訪ねる機会を持つなど城郭に関わりを持つようになったわが身にとっては意を同じくする点が多い。要するに、日本建築史は、城の建築を日本建築史上どのような系譜に置くかということにまだ成功していないのである。

実は、これはかつて「民家建築」にも「江戸建築」にも「明治・大正・昭和戦前の建築」にも言われたことだった。それらの建築が曲がりなりにも日本建築史の中に定位できるようになったのは、ある時期、文化庁・日本建築学会主導の、それらを対象にした全国一斉調査が行われたためだった。そこに集まった膨大な調査資料が、論文という形をとりながらその全容を少しずつわれわれの目の前に現れたてきたことの意義は大きい。

翻って、日本城郭建築はどうか。現在に残る近世城郭建築の研究は遅々であるとはいえ、進んでいないことはない。しかし、元和元年（1615）の一国一城令による破城や明治維新の廃城によりその遺構数は少なく、また残った遺構も長い年月の間に改変され、築城から今日に至るまで忠実にそのあとをたどることは難しい。研究の足跡は決してはかばかしいとはいえない。

しかるに近年、3万から4万といわれる中世山城の探査を中心に、発掘成果も蓄積されてきて

おり、近世城郭建築の日本城郭史上における位置づけへの機運は高まってきている。そうは言っても、建築そのものの遺構数が増えたわけではない。

そのような状況を踏まえながら、本稿では、天守閣に代表される日本の近世城郭建築の技術的、表現的側面の、日本の建築史上における連続性を考えてみる。

【1】城郭建築の系譜

城郭建築といわれてすぐに思い浮かべるのは姫路城天守に見られるような天守閣であろうが、防御機能を有する施設としての「城」であってみれば、堀やその石垣なども城郭要素に入る。その防御機能を有する城郭の系譜としては、弥生時代の環濠集落（たとえば佐賀県吉野ヶ里遺跡）や古代の山城（たとえば福岡県大野城）あるいは城柵（たとえば宮城県多賀城）、中世の大名館（たとえば福井県朝倉館）など、人類の歴史の御多分に洩れず、日本の建築史上にも連綿と建て続けられてきている。そういった意味では城郭建築の系譜は連続しているといえる。

しかしここで問題となるのは、わたしたちが身近な「城」をイメージする際に思い起こす天守閣建築が、織田信長の安土城（滋賀県）を嚆矢として突如現われ、それ以降、城郭建築の典型像となったと言われてきたことである。そのときに藤森氏の言う「天守閣は日本建築史上ただ一つヘンな存在である」ということになる。ではどうヘンであるのか次に考えてみよう。

【2】天守閣建築の出現とその消長

天正7年（1579）、織田信長によって建てられた安土城は絢爛豪華そして奇想天外な城郭であったという。安土山の頂上に建つ五重七階の建物、信長はそれを「天主閣」と呼んだ。五重七階とは、外観五層の屋根の中に七階分の床が張られているということである。そこには瓦が葺かれ、石垣が多用された。それらが一体化したものが安土城と考えれば、このような城郭はそれまでの城郭建築には見られないものであった。天正10年（1582）の本能寺の変の際に安土城天守閣は焼け落ち、その実態をいま目にすることができない。

この後、豊臣秀吉の桃山城・大坂城・聚楽第を始め、徳川の江戸城・二条城、各大名の作る城々は皆この系譜につながる。慶長8年（1603）、徳川家康が征夷大將軍になった後も城は造られ続けるが、元和元年（1615）、大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡するとともに「一国一城令」が発布され、全国にあまたあった城は中世山城も含め破壊されてしまった。その後建てられた城もないわけではないが、一方では城を構えながら天守閣を持たない城もあった。やがて明治維新を迎え、廃藩置県の結果、破却される城も多く出た。また、名古屋城（愛知県）など第二次世界大戦の戦火によって失ったものも多い。現存する天守閣を持つ城は、弘前城（青森県）、松本城（長野県）、犬山城（岐阜県）、丸岡城（福井県）、彦根城（滋賀県）、姫路城（兵庫県）、備中松山城（岡山県）、松江城（島根県）、丸亀城（香川県）、宇和島城（愛媛県）、伊予松山城（愛媛県）、高知城（高知県）の12城である。



写真1 姫路城 天守



写真2 松本城 天守

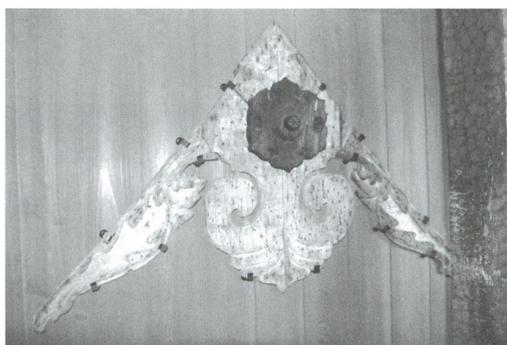


写真3 松本城 懸魚



写真4 姫路城 頼立

【3】天守閣建築の特徴

(1) 姫路城と松本城

姫路城（写真1）や松本城（写真2）に見られる天守閣群の美しさには、誰も異を唱えるものがない。均衡を保った天守群の配置は、その大きさや高さが表現する重厚感ともあいまって、たとえそれが白鷺城（姫路城）であれ烏城（松本城）であれ、外壁の色とかかわりなく賛嘆の声を上げる。各層の屋根の軒の水平線と唐破風や千鳥破風の配置などが織り成す外観は、その効果を遺憾なく発揮し、造形の妙を感じさせてくれる。外観細部に目を向けてみても、破風の挿みにある懸魚の完成度なども当時の社寺建築のそれに負けず最高水準のできのものである（写真3）。両者とも国宝建造物であり、姫路城は世界遺産にも登録されている。

ところが姫路城大天守の外観には1つだけ気になるところがある。軒を支え、斜めに飛び出す部材「頼杖」の連続が作り出す造形である（写真4）。日本建築の構成材は元来垂直、水平を基調とするために、このような斜材が連続する外観の造形は当時の他のどの建物にも見られない。異形の造形である。破調といってもいいかもしれない。そういう目で見てみると、軒裏の垂木を漆喰で塗りこめた姿や石落しの白漆喰塗込めも気にならないわけではない。

今度は天守閣の内部を見てみる。電灯もないため内部は暗いが、最初はその薄暗さや部材の大

きさもあいまって、空間の力強さに注意が向けられる。やがて幾重にも重なる急勾配の階段を登ると、大天守最上階からの絶景が待っている。遠く開けた市街を見下ろしながら、先ほど下で見た天守閣の最高所に自分がいることを自覚するときこそ、この天守閣の外観と内観が交錯する瞬間に他ならない。

ところで(写真5)は姫路城大天守3階のものだが、城の外観に比べて明らかに様相が異なることが分かるだろう。外観の華やかさに較べて内観はおとなしく表現がまとめられている。ここには内観と外観の表現の明らかな違いが見て取れる。これは松本城でより明確になる。

(写真6)は松本城乾小天守の1階、(写真7)は松本城天守1階のもので、いずれも太く力強い柱がむき出しに林立している。さらに(写真8)は松本城乾小天守の最上階、(写真9)は松本城天守の最上階だが、いずれも天井が張られておらず屋根下地の小屋組がむき出しのままになっている。ここには外観に見られたような、たとえば懸魚や破風に見られるような、造形への配慮は感じられない。



写真5 姫路城 内部



写真6 松本城 乾小天守内部



写真7 松本城 大天守内部

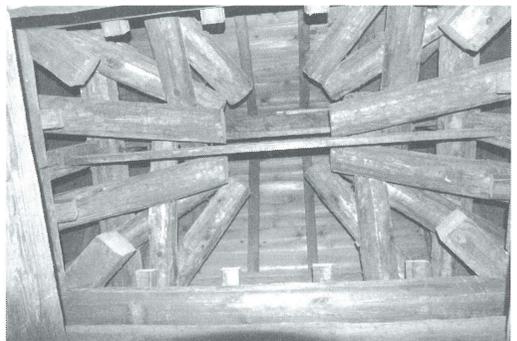


写真8 松本城 乾小天守最上階

以上のことは天守閣にとどまらず、他の櫓や城門など、広く城郭建築にも通底している。



写真9 松本城 大天守最上階



写真10 姫路城「ぬ」の門外観



写真11 姫路城「ぬ」の門内側



写真12 丸岡城 天守

(写真10)(写真11)は姫路城櫓門「ぬ」の門の外側と内側のものだが、門の表側で整形されている部材に対して、内側では曲がりを持ったままの仕上げの粗い、丸い梁が使われている。天守閣で見た外観と内観の表現の違いがここにも顕れている。

(2) 城郭建築の内と外の表現

上記したことを他の城郭で検証してみよう。

福井県にある丸岡城(写真12)は、築造年が天正4年(1576)とする説と慶長17年(1612)の本多成重の入城以降とする説の2つがあるが、掘立柱を使うことや高欄の廻る外縁の付く望楼を備えること、格子窓の太い連子子など、現存天守の中でも古い意匠を持っている(写真13)。また屋根瓦には笏谷石製の石瓦を用いている(写真14)。

(写真15)が天守の内観だが、柱も太い梁も曲がった材を使用しており、外観とは仕上げの具合が異なる。ただそれも、太い連子子や野面石積みの石垣、石瓦に見える力強さと呼応した意匠と捉えることもできないわけではない。しかしそれでも懸魚の繊細な意匠とは相容れない。

(写真16)は丸亀城。元和元年(1615)の一国一城令で廃城になった後、寛永17年(1640)山崎家治が入城し再興。明暦3年(1657)京極高和が入って天守閣を完成し、その後明治に至るまで京極7代の居城となる。



写真13 丸岡城 天守外観



写真14 丸岡城 石瓦



写真15 丸岡城 天守内部

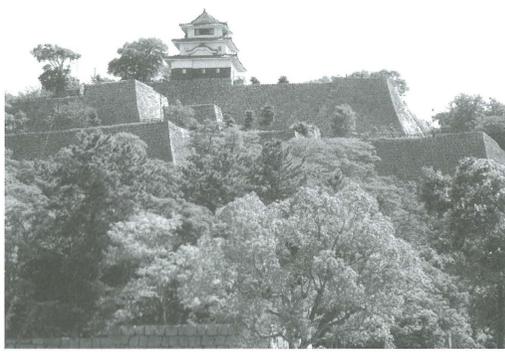


写真16 丸亀城 天守

(写真17)は大手二の門の城外側の写真となるが、(写真18)に見られるように、正面側の律儀な意匠に対して城内側(写真右側)の梁は太く大きな曲がった材を用いている。これは2階内部も同様で、天井を張らず小屋裏をむき出しにしたままの仕上げとなっている(写真19)。



写真17 丸亀城 大手二の門正面



写真18 丸亀城 大手二の門内部側面

(写真20)が三階三重の本丸天守となるが、この最上階も天井を張らないままのものとなり(写真21)、内外の表現を違えることは一連のものと同様である。

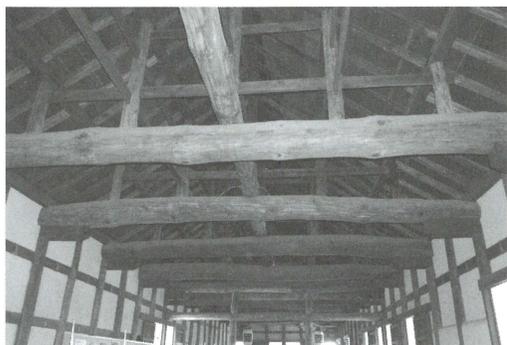


写真 19 丸亀城 大手二の門2階内部



写真 20 丸亀城 天守



写真 21 丸亀城 天守最上階



写真 22 彦根城 天守

【4】城郭建築の表現と技術の系譜

(1) 彦根城

慶長5年（1600）の関が原の合戦後、井伊家が石田三成の旧領に入り、慶長8年、天下普請により彦根城の築城を始める。元和元年（1615）の大坂夏の陣後、山麓に表御殿を造営するなど第2期工事が始められ、元和8年（1622）その完成を見る。

三重三階の天守閣は大津城の天守を移築したもので、国宝建築物に指定されている（写真22）。天守へは多聞櫓から入るが、その梁組は圧巻で、縦横に波打つ梁が生き物のように組み合わされている（写真23）。これは天守も同様で、形を整えないままの梁材がまるで命あるがごとくに、大工棟梁が自身の技術を誇るかのように軽々と配されている（写真24）。また、3階最上階でも梁は整形されておらず、その上の天井は張らずに小屋裏をそのまま見せている（写真25）。



写真23 彦根城 多聞櫓内部



写真24 彦根城 天守2階

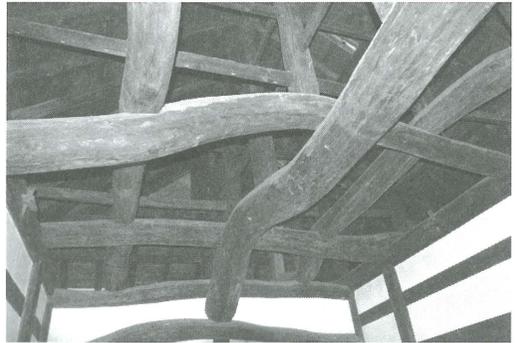


写真25 彦根城 天守最上階

(2) 近世民家と中世寺院の庫裏建築

彦根城で見るとような高度で柔軟な梁組の様子や、あるいはまた城郭建築の外観と内観の違いに見るような表現は、実は近世民家では当たり前のように体験できる。

(写真26)は旧作田家住宅(現川崎日本民家園 旧千葉県九十九里町 17世紀後期 重要文化財)で、(写真27)はそのヒロマ上の梁組の様子だが、彦根城天守の梁組となんら変わるところはない。これら民家に見られる建築技術は、古代より長い年限をかけて民衆レベルにまで流布するにいたった、日本の建築技術の最高到達点と見られているが、このような民家建築に見られる技術と表現の先行例として中世寺院の庫裏が上げられる。

(写真28)はあきる野市の大悲願寺庫裏(江戸期)の梁組の様子だが、写真で見るとおり、彦根城天守や旧作田家住宅の梁組と変わるところはない。中世寺院の庫裏建築はこの大悲願寺庫裏と似たような造形をしている。

この中世寺院の庫裏建築と近世民家建築の間に、中世末から近世初頭における城郭建築の技術・表現を位置づけてみることは今だかつて試みられることがなかった。こう措定することによって、近世城郭建築の孤立性と特異性の一部は解消されるかもしれない。



写真 26 旧作田家住宅 外観

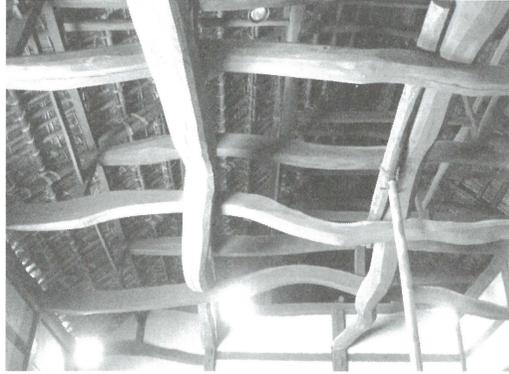


写真 27 旧作田家住宅 梁組



写真 28 大悲願寺 庫裏梁組

おわりに

中世末、近世初頭の城郭建築，ことに天守閣建築における内外の表現の異なる様態とそこに露頭する建築技術に注目し，中世寺院の庫裏建築と近世民家との間に天守閣建築を関連付けてみた。しかしこれは目の粗いスケッチであって，さらに精査しなければいけない点も多い。

その1つは，織田信長の建てた安土城の内観は，ここに上げられた天守閣とは違って大変絢爛豪華なものであって，ここに述べたような系譜にはそのままでは納まらない。これは残された天守閣の長押の有無，天井の有無の違いとなって現れているように思う。その内装の系譜がどのような形で継承され，あるいは放棄されたのかということの考究であろう。

また，天守と御殿の問題も取り上げなければならない。ここで書いた論旨は，同じ城郭建築でありながら御殿建築には当てはまらない。御殿建築は他の伝統建築の表現の系列に属する。今のところ当てはまるのは民家，庫裏，城郭だけであるが，表現の問題としては他にも事例が見つけられそうである。たとえば神社本殿やその覆舎が該当するだろう。それを取り込む必要がある。

また，最近とみに進捗しつつある発掘資料の成果から，織田信長の安土城の新たな位置づけや織豊系城郭と近世城郭との識別も始まっている。その建築史的な検討が要請されているが，いずれも今後の課題としたい。